

マックス・ヴェーバーと「近代文化」

—『倫理』論文は何を問うのか (2)—

三笥 利幸ⁱ

本稿(1)では、『倫理』にまつわる誤解——ヴェーバーは『倫理』でプロテスタンティズムと資本主義の発展の関係を論じている——について論じてきた。ここでは、『倫理』第1章第1節の論理構成を見ていく。というも、その誤解はまさしくこの『倫理』冒頭から始まることが多く、さらに、この箇所の無理解がその誤解を許しているからである。この『倫理』第1章第1節「信仰と社会層分化」では、その表題どおり、信仰と社会層分化にかんする議論がなされる。つまり、今日の「職業統計」に見られる近代的企業における資本所有者、企業家、上層熟練労働者層にプロテスタントが多い、という現象は、どのように説明されるべきかについて、ヴェーバーは、いくつかの仮説を提示してはそれを検討し棄却していく。最終的にヴェーバーは『倫理』において問題設定をすべき場所を確定する。それは「古プロテスタンティズムの精神における一定の特徴と近代資本主義文化との間の内面的な親和関係」である。ただし、これはまだ明確な問題設定に至っていない。そのためには、『倫理』第1章の残りの節で、資本主義の精神やルターの職業概念を論じなければならない。この点については次号以降で論じる。

キーワード：ヴェーバー、『倫理』論文、プロテスタンティズム、精神、資本主義文化、近代文化、社会層、内面的親和関係

目次	文化の内面的親和関係の探索
はじめに	(以上本号、以下続く)
1. 『倫理』の問題設定に対する誤解	3. 資本主義の「精神」とルターの職業概念——鍵概念の準備
1-1. 誤解の流布	
1-2. 『倫理』初版への誤解、批判、反批判、そして『倫理』改訂 (以上第55巻第2号)	4. 『倫理』の問題設定とはおわりに
2. 『倫理』第1章第1節の論理構成	
2-1. 信仰と社会層分化への注目	
2-2. 経済を原因とする「一般解放説」	2. 『倫理』第1章第1節の論理構成
2-3. 教育によって得られる精神的特性への注目	
2-4. 外的状況から形成される精神的特性——「過補償説」	
2-5. 信仰の内面的特質についての漠然とした「社会通念」	
2-6. 古プロテスタンティズムの精神と資本主義	

『倫理』第1章の吟味に入る前に、ここでひとまず、『倫理』論文(改訂版)が以下の構成になっていることを確認しておきたい。ヴェーバー自身はKapitelやAbschnittという表記はしておらず、ローマ数字で前半と後半をIとIIに分け、それぞれの内部をさらにアラビア数字を使って節立てをしている

i 立命館大学産業社会学部教授

ただだが、以下では「章」と「節」を補って表記する¹⁴⁾。

第1章 問題

第1節 信仰と社会層分化

第2節 資本主義の「精神」

第3節 ルターの職業概念。研究の課題

第2章 禁欲的プロテスタンティズムの職業倫理

第1節 世俗内的禁欲の宗教的基盤

第2節 禁欲と資本主義精神

ヴェーバーの『倫理』における問題設定は、節の題名にあるとおり、「第1章 問題」の最後、つまり、「第3節 ルターの職業概念。研究の課題」において現れる。それゆえ、ヴェーバーの「研究の課題」を読んでいくためには、この第1節、第2節そして第3節の「ルターの職業概念」までを検討しなければならないことになるだろう。しかし、本稿の課題は『倫理』の問題設定をあきらかにすることに限定しているし、『倫理』の約3分の1を使って論じられている第1章をすべてにわたって子細に検討することは本稿の手に余る。そこで以下では、ヴェーバーの問題設定を吟味するために必要な限りで第1節から第3節についての議論を取り上げていくことにする。具体的には、『倫理』が解き明かすべき点はどこにあるのかを種々の仮説を吟味して見きわめていく第1節は詳細に検討し¹⁵⁾、資本主義の「精神」やルターの職業概念についてはその論じられ方の特性が分かるような分析を中心に行って、『倫理』の問題設定へ至ることにしたい。

2-1. 信仰と社会層分化への注目

目次からあきらかなように、『倫理』は第1章で問題設定がなされ、それが第2章で論じられていく、という構成になっている。特に、第1章では、(1) 信仰と社会層分化、(2) 資本主義の「精神」、(3) ルターの職業概念、がそれぞれ論じられたあと、「研究の課題」が設定されるのである。章と節の構成か

ら読みとれる、このあまりに基本的なことが、少なからず見落とされ無視されていないだろうか。というのも、第3節に登場すると明示されている「研究の課題」が、第1章第1節の、それも出だしの部分に出現しているかのように受け取る向きが多いからである¹⁶⁾。

以下に引用するのは、『倫理』がまさしく書き始められるところである。

さまざまな種類の信仰が混在している地方 Land の職業統計を一瞥すると、きわめて高い頻度で、次のような現象が見出される。それはカトリック派の新聞や文献やドイツ・カトリック派会議の席上でも幾度となく活発に論議されていることだが、近代的企業における資本所有や企業家についても、あるいは上層の熟練労働者層、とくに技術的あるいは商人的訓練のもとに教育された上層の従業者たちについても、彼らがいちじるしくプロテスタント的性格を帯びているという現象である。[MWGI/18: 123-6=大塚訳: 16]

この箇所にかかれるのは、今日の「職業統計」から見いだされる現象であり、その現象についてはヴェーバーがはじめて発見したわけではなく、すでに各所で議論されているような、周知の現象である。その現象 Erscheinungen とは、近代的企業における資本所有者、企業家、上層熟練労働者層にプロテスタントが多い、という現象¹⁷⁾である。この節の題名のとおり、「信仰」と「社会層」について観察できる現象が記されている。

ところが、この引用箇所が、資本主義に適した人あるいは経済的に成功した人にはプロテスタントが多い、と読まれてしまうようである。そもそもこの引用のなかで、「資本主義」という経済制度はまったく問題とされていないし、ましてや、それに適したとか、そこで経済的に成功しているとかいった評価もなされていない。しかし、ここでヴェーバーがプロテスタンティズムと資本主義について仮説を

立て、さらには、プロテスタンティズムに帰依することがなぜ経済発展をうながしたのかという問いを立てたと錯覚してしまうようなのである。たとえば、仲正は、上とまったく同じ箇所を大塚訳そのままに引いた上で、次のように述べる。

カトリックとプロテスタントでは、教義や教会での儀礼が異なるので、信者のライフスタイルも異ってくるのは当然だが、ウェーバーはそれが経済生活に対する態度の違いを生み出し、プロテスタントの方が資本主義と親和性があるのではないかという仮説を提示しているわけである。……一九世紀後半に第二次産業革命と資本主義をリードしたアメリカ、イギリス、ドイツはプロテスタント人口が多い国家である。[仲正 2014: 24-5] (傍点は引用者)

また、橋本も「プロテスタントの人たちは、なぜ経済的に成功したのか」という小見出しをつけた節で、同じ箇所を彼の「私訳¹⁸⁾」で引用して、次のように述べる。

プロテスタントの人たちは、カトリックの人たちよりも経済的に成功している場合が多い。そういうことが最近、カトリックの人たちのあいだでよく論じられている。けれどもプロテスタントの人たちは、どうしてカトリックの人たちよりも経済的に成功しているのだろうか。ウェーバーはこんな素朴な疑問から始めている。[橋本 2019: 27] (傍点は引用者)

表現が違うとはいえ、両者は『倫理』冒頭を、プロテスタンティズムと資本主義あるいは経済発展との関係について仮説が提示され、問いが設定されたものだととらえている。これは誤読というよりも、ヴェーバーはそうしているはずだと信じて疑わないところから導き出された「決め打ち」と見ていい読みである¹⁹⁾。

そもそもヴェーバーが利用している資料は、所有財産や年収の多寡にかんするような統計ではない。

裕福であるのかどうか、経済的成功者かどうかが直接的にわかる統計ではなく、信仰と職業選択による社会層分化を観察できる現代の職業統計である。くどいようだが、「信仰と社会層分化」という節の題名のとおり、資本主義的営利活動にたずさわる職業に就いた社会層にプロテスタントが多いという事実がある、ということが『倫理』の冒頭に書かれたことである。これを見失わないでおかねばならない。

ところで、職業統計を見て、資本主義的営利活動に従事する社会層にプロテスタントが多いという事実が読みとれるとして、すぐさまそこに何らかの関係があると考えるのは性急である。これはあくまでも相関関係に過ぎないからだ。この現象はまったくの偶然かもしれないし、何か強い関係があるかもしれない。いずれにせよ、それをこの現象の外見だけから判断することはできない。

しかし、こうした大づかみな周知の現象については、その当否は別として、人びとのあいだでも漠然とした「推測」「憶測」が現れ、それなりに「説明」されることがしばしばである。そして、この資本主義的営利活動従事者層にプロテスタントが多いという現象も例外ではない。このあとヴェーバーは『倫理』第1章第1節でいくつかの仮説を検討し、その妥当性を吟味していく。ヴェーバーは、この節を閉じようとするとき、ここでは「漠然とした一般的な表象の範囲」[MWGI/18: 148=大塚訳: 37]で議論してきたと述べるが、まさしくこの節では一般社会通念あるいは常識的理解と呼ぶべきものを検討して、問題のありかを絞り込んでいくのである²⁰⁾。

ヴェーバーが『倫理』の結論で述べたのは、ここでは「近代文化」についての考察を行ったということだった。先走ってしまうようだが、ヴェーバーは、プロテスタンティズムと資本主義的営利活動従事者層との関連に、表面的で社会通念的な理解では解明できない「近代文化」にかかわる「本質的構成要素のひとつ」を剔抉しようとしているのである。

2-2. 経済を原因とする「一般解放説」

ヴェーバーは、経済現象が原因として社会層分化が起こり、その結果として特定の社会層が特定の信仰に帰依したと想定してみせる。実際、16世紀のドイツでプロテスタンティズムに帰依したのは無数の富裕な都市だったという事実があるし、現在においてもプロテスタントたちは経済的に有利な立場にあるという事実もある [MWGI/18: 128=大塚訳: 17]。先だってそれなりの資本所有があり、また教育への支出ができた人びとが、資本主義的営利活動にたずさわる社会層の一員となった。その結果、彼らがプロテスタンティズムに帰依した、という線を想定してみせたのである。しかし、仮にそうであったとして、そうした社会層が結果としてなぜプロテスタンティズムに帰依したのかという理由は簡単には見いだせない。

そこで、経済という側面を勘案しつつ、彼らの改宗の動機を探っていくと、「一般解放説²¹⁾」と呼ぶ仮説が浮かび上がってくる。ヴェーバーは gewiß から書き始めて、次のようにいう。

たしかに gewiß, 経済的伝統主義からの脱却 Abstreifung が、宗教的伝統にも疑念をもたせ、伝統的権威へ反抗させる傾向へ、まったくもって本質的に力を貸した要因のように思われるだろう [MWGI/18: 128=大塚訳: 17]。

見られるように、資本主義的営利活動にたずさわり、経済領域における伝統からの「解放 Abstreifung」を果たした彼らは、宗教領域についても伝統から「解放」された、という仮説を想定することができる。あるひとつの領域における伝統について疑問を持ち始めると、それが飛び火して別の領域にも及んでいくというのは、一般経験則から考えて十分あり得ることだと推測できよう。経済的伝統から解放を選ぶことができた人びとは、今度は宗教においてもその伝統から解放放たれる道へ進むことができた、と。しかし、ここでヴェーバーは疑問を呈する。先の引

用の次に、aber で書き始める一文である。

しかし aber, この点については、今日忘れられがちな一つの事実を考慮しなければならない。それは、宗教改革は生活に対する教会支配を排除したのではなく、むしろ、従来の支配の形式を別の形式に置き換えたということを意味するということである。しかも、最も快適で、実質、当時ではほとんど気付かれないほどの、しばしばほとんど形式的でしかなかった支配を、考えられるかぎり家庭生活と公的生活のすべての空間に入り込む、際限なくやっかいで、真剣な規律化 Reglementierung を、生活態度全般にわたって要求するものだったのだ。[MWGI/18: 129=大塚訳: 17-8]

伝統からの「解放」を目指したという「一般解放説」では、生活一般を以前より強く規制するプロテスタンティズムに帰依したということを説明できない。つまり、営利活動にたずさわる職業に従事して経済的伝統から「解放」されたとしても、だからといってその「解放」が宗教領域に及んだなどという短絡的な想定はできず、それどころか、彼らはむしろより強く「その時まで知られていないピューリタニズムの専制支配」 [MWGI/18: 130=大塚訳: 18-9] を受け入れているのである。「一般解放説」とは真逆の事態が認められるとすれば、この仮説は支持することはできない。

こうしてヴェーバーは「一般解放説」を棄却したが、考えてみれば、この「一般解放説」は、すでに経済的原因によって社会層分化が起こっており、そのあとに信仰が選ばれるというものである。つまり、「一般解放説」は、社会層分化に信仰は直接的な関係を持っていないという説であった。それが否定されたいま、次なる考察は社会層分化に信仰が直接的な関わりを持つという局面になる。現象として確認できる社会層分化は、信仰との直接的関係を無視して論じることはできないわけである。

2-3. 教育によって得られる精神的特性への注目

ヴェーバーは再び信仰と社会層分化にかかわる別の統計に注目する。それは、信仰と教育、信仰と職種にかんする統計である。そこには、いま棄却した「一般解放説」、つまり、経済を原因とし宗教への帰依を結果とする仮説があきらかに誤りであることを示す現象が見られる。

ヴェーバーはカトリック、プロテスタントそれぞれが、子どもに与える高等教育についての統計を利用する。

……まず、バーデンやバイエルン、またたとえばハンガリーなどまったく広く認められることだが、カトリックの両親が通常その子供にあたえる高等教育の種類は、プロテスタントの両親の場合とは明確に異なっている。……カトリックの大学入学資格保有者内部でも、特に技術の学習や商工業の職業のための準備や、総じて市民的営利生活向きの近代的な施設、たとえば実科ギムナジウム、実業学校、高等小学校などを修了する人の比率は、プロテスタントの場合に比べてはるかに小さく、また、これに対して、カトリックが人文主義的ギムナジウムで施される基礎教育 *Vorbildung* のほうを好む——これは、先のようなやり方(上述の「一般解放説」——引用者)では説明できないのであり、むしろ逆に、カトリックが資本主義的営利にたずさわる割合が小さいということを説明するための現象である。[MWGI/18: 131-2=大塚訳: 20-1]

カトリックはプロテスタントに比べて、大商工企業における資本所有者、企業家、高級労働に向かうために必要な教育を子どもに与えることが非常に少ない。むしろ彼らはそうした資本主義的営利活動とは縁遠い、教養教育を好む。こうした文化的差異がプロテスタントとの間に見られるとヴェーバーはいうのである。

経済という因子とは別の関連、つまり、教育においてカトリックとプロテスタントとに明確な差異が

見られる。親が子どもに受けさせる教育の差異が、のちの職業選択の違いにつながっている。まずこの点が確認された。

さらに、もうひとつ「カトリックが近代的大工業の熟練労働者層に入っていることがより少ないことを理解するのに役立つ、もっと明瞭な現象がある」[MWGI/18: 132=大塚訳: 21]として、以下のように述べている。

工場の熟練労働力は手工業の子弟から採用されることが非常に多く、したがって手工業がこういう労働力のために準備 *Vorbildung* を与える場所となり、そうした準備を終えた後に、それを大企業に引き渡すということは、よく知られた現象だが、それは、カトリックの手工業職人 *Handwerksgeselle* の場合よりもプロテスタントの手工業職人の場合のほうにはるかに明確に認められる。別のいい方をすれば、カトリックの手工業職人は手工業に止まる傾向が強く、したがって親方 *Handwerksmeister* となることが比較的多いのに対して、プロテスタントは比較的多く工場へ流入し、熟練労働者の上層や工業経営の幹部になろうとするというのだ。[MWGI/18: 132=大塚訳: 21-2]²²⁾

見られるように、カトリックは近代的営利生活ではなく手工業にとどまりその親方職人となることを選ぶのに対して、プロテスタントは資本主義的工場の上層熟練労働者や経営幹部になろうとする傾向にある。職業選択およびその後の志向にもまた明確に、カトリックとプロテスタントにおける違いが見いだせる。

以上、教育と職業選択およびその後の志向について、カトリックとプロテスタントとの違いを確認した後、ヴェーバーは次のように述べる。

これらの場合には、因果関係は明白に次のとおりである。すなわち、それらの人々の教育によって身についた精神的特性 *anerzogene geistige Eigenart*、しか

もこの場合は故郷や両親の家庭の宗教的雰囲気によって制約された教育の方向が、職業選択とその後の職業上の運命を決定している。[MWGI/18: 132-3 =大塚訳: 22]

教育²³⁾によって生み出された「精神的特性」によって、その職業が選びとられ、さらにはその後の地位もその影響を受ける。ヴェーバーは経済的な財産条件ではなく、その人物の持つ「精神的特性」こそ、信仰と社会層分化の相関関係を説明する重要な因子としたのである。いいかえれば、社会層分化に信仰が「精神」という点で直接的な関わりを持つことを探り出したのである。

ところで、ここでヴェーバーが「精神的特性」と述べていることに注意したい²⁴⁾。なぜなら、この時点で、ヴェーバーははっきりとプロテスタンティズムが生み出す精神を問題としていることがわかるからである。ヴェーバーは、ルターやカルヴァンといった宗教的達人や彼らの説いた神学的教理それ自体を問題としているのではない。また、資本主義という制度も、ここで問題にしようとしてはいない。プロテスタンティズムという信仰と資本主義的営利活動に従事する職業人たちの社会層との直接的な関係を、「精神」に注目して解明しようとしているのである。

この「精神的特性」は教育によって生み出されるものであった。ヴェーバーがここで見ている教育とは義務教育ではなく、親たちが選びとって子どもに与えた教育である。となれば、この教育は「故郷や両親の家庭の宗教的雰囲気」によって決定づけられたものといえよう。ならば、その教育を受けさせるにいたる「故郷や両親の家庭の宗教的雰囲気」がいかに形成されるのが次に探るべき課題となる。私の責任でもう少し柔らかく言葉をかえれば、それは、カトリックがカトリックらしい「精神的特性」を持ち、プロテスタントがプロテスタントらしい「精神的特性」を育むのは、いかなる要因によるのか、ということである。さらにこの先の議論を見通してい

えば、それは外在的要因ではなく、宗教内在的な要因によるのである。

さて、ヴェーバーが信仰と社会層分化について「精神的特性」に直接的関係を見いだした地点までたどり着いた。では、その「精神的特性」はどのように形成されるのか。次なるヴェーバーの考察に進みたい。

2-4. 外的状況から形成される精神的特性—— 「過補償説」

ヴェーバーは、次のような広く認められている一般経験則を提示する。

……民族的 nationalあるいは宗教上の少数者は、「被支配者」として他の「支配者」集団と対立していると、意図してであれ意図せずであれ政治的に有力な地位から閉め出されることによって、特にいちじるしく営利の道へ向かうことになるのが常で、また、彼らのうち最も才能ある者たちは、国家の職務 Staatsdienst という舞台では発揮できない彼らの名誉欲をここ（営利——引用者）で満たそうとする、ということである。[MWGI/18: 133=大塚訳: 23-4]

ここに示された一般経験則は、「過補償説²⁵⁾」と呼んでよいものである。そして、「過補償説」によれば、次のような予想（仮説）がなされるということになる。たとえば、ある地域でカトリックが宗教的理由から政治的少数派となっているとすれば、信仰ゆえに政治的に有力な地位から閉め出されたことが強く信徒の「精神的特性」の形成に影響を与え、道を塞がれた政治ではなく経済領域で名誉欲を満たそうとするだろうという予想である。

しかし、こうした仮説には、すぐさま次のような反証が挙げられてしまう。

……プロテスタント（とりわけあとで特に取り扱うあるもの）は、支配層でも被支配層でも、多数派でも少数派でも、特有な経済的合理主義への傾向を示

してきたが、カトリックのばあいは、前者の場合も後者の場合も、同じ傾向は見られなかつたし、現在も見られない。[MWGI/18: 134=大塚訳: 24]

政治的状况に関係なく、プロテスタントは経済的合理主義の傾向を持つがカトリックはそうではないということが歴史貫通的に観察されてしまう。そうであれば、その人の行動にみられる「精神的特性」は、信仰にまつわる外在的な条件に左右されるというより、むしろ帰依する宗教に内在した要因によると見なければならない。

そうであれば、こうした異なった行動をとる原因は、主に、それぞれの信仰の持続的な内面的特質に求められるべきであって、それらがおかれたその時々を外面的な歴史的-政治的状况だけに求められるべきではない。[MWGI/18: 134-5=大塚訳: 24-5]

ここにヴェーバーは、信仰それ自体の内面的特質に、その検討すべき対象をより鋭く限定していくのである。

整理しておこう。ヴェーバーは、(1) 信仰と社会層分化との直接的関係を認め、(2) それを信仰の「精神的特性」から探る、という地点に行き着いていた。そしてここでは、(3) 「精神的特性」は、信仰それ自体の内面的特質から生み出される、としたのである。もちろん、次なる考察は、信仰の内面的特質にかんしてとなる。節を変えて見ていこう。

2-5. 信仰の内面的特質についての漠然とした「社会通念」

カトリックとプロテスタントそれぞれの「信仰の特性」[MWGI/18: 136=大塚訳: 26] はいかなるものか。ヴェーバーは、その「内面的特質」として現在語られている、またしても一般に流布して多くの人がそれがそれで説明可能だと思ふような、「社会通念」とも呼ぶべきものを吟味する。

ひとは、表面的な観察とある種の現代的印象 modern Eindruck によって、この対比を次のように定式化したくなるのだろう。すなわち、カトリシズムはより多く「非現世的 Weltfremd」であり、その最高の理想が指し示すように禁欲的傾向があるために、信徒たち Bekenner は現世の財貨に対してより多く無関心な態度をとるように教育される erziehen のである、と。[MWGI/18: 136=大塚訳: 26]

この信仰の「内面的特質」にかかわる「社会通念」は、カトリック、プロテスタントともに、自ら自身自身の信仰のあり方について判断を下す際にも「今日一般に好んで用いられる図式」[MWGI/18: 136=大塚訳: 27] (傍点は引用者) である。カトリシズム=非現世的、プロテスタンティズム=現世的、という理解は、他ならぬ信徒本人が自身の信仰のあり方について受け入れる理解なのだから、まちがいはなく正しいものとされそうな「社会通念」である。ましてや、ある現代の学者——『全集』編者も指摘するように、これはオッフエンバッハであろう [MWGI/18: 137]——までもが、プロテスタントは「うまいものを食おう gut essen wollen」とする、すなわち、現世的で「世の楽しみ Weltfreude」を求めようとする、と信じ込んでいる強い「社会通念」だとヴェーバーは指摘しているわけである [MWGI/18: 137=大塚訳: 27]。

たしかに、この現在の社会通念は「ドイツの、現在におけるプロテスタントのうち教会に無関心な人びと²⁶⁾」[MWGI/18: 137=大塚訳: 27] については、ある程度は当てはまる。だからこそ、この通念が普遍的に正しいものとして確認できるかのような錯覚を与え、「社会通念」として通用してしまうのだろう。しかし、カトリシズムが「非現世的」だとかプロテスタンティズムが「世の楽しみ」を求めるとかいう「漠然とした観念」には明確な反証——イギリス、オランダ、アメリカのピューリタンは「世の楽しみ」とは正反対の生活態度の真面目さ、宗教的厳格さを持っていた [MWGI/18: 137=大塚訳:

27-8]——がある。また、「非現世的」という「漠然とした観念」を生活態度の真面目さや宗教的厳格さという意味だととれば、カトリシズム、プロテスタンティズム双方にその「非現世的」性格が認められる場合がある [MWGI/18: 137-8=大塚訳: 28]。こうしたところをみれば、この社会通念の「大雑把さ」では、現在にも、少なくとも過去には、まったく妥当しない [MWGI/18: 138=大塚訳: 29] のであって、こうした説明以外の説明が必要なのだ。ヴェーバーはこれ以上、この「社会通念」が偽であることを示す具体的現象を挙げる必要はないと考え、次のように述べる。

……一方の非現世的で、禁欲的でありそして信仰に厚いことと、他方の資本主義的営利生活に携わることとのあいだには対立があるのではなく、むしろ反対に内面的親和関係 *innere Verwandtschaft* にあると考えるべきではないか [MWGI/18: 138=大塚訳: 29]

プロテスタントたちが受け入れた「考えられるかぎり家庭生活と公的生活のすべての空間に入り込む、際限なくやっかいで、真剣な規律化」による、禁欲的で信仰心に厚い生活のあり方は、一見したところ 外面的には資本主義的営利生活とは縁遠く、表層的な観察や現代の印象によって形成された信仰の内面的特質にかんする「社会通念」を受け入れてしまい そうになる。しかし、それは以上のように否定された。となれば、外面的には矛盾するように見える禁欲的な信仰の生活と資本主義的営利活動とが、内面的に関連すると考えなければならぬ²⁷⁾。

ヴェーバーのここまでの議論を再び整理しておこう。(1) 信仰と社会層分化には直接的な関係がある。(2) その直接的関係は信仰の「精神的特性」によるものである。(3) その「精神的特性」は信仰の内面的特質によって生み出されるものである。(4) 信仰の内面的特質にかんする社会通念や外面的表層的把握は失当であり、禁欲的な信仰と資本主義的営利活

動にたずさわることには内的な親和関係があると見なければならない。

2-6. 古プロテスタンティズムの精神と資本主義文化の内面的親和関係の探索

上で検討した、社会通念や現代的印象の類いではなく、禁欲的であるということを引きまねながら、信仰と資本主義的営利活動との関係を直接的かつ内的な連関として説明する段になったが、ここでヴェーバーは「反動形成説²⁸⁾」と呼ぶべき仮説を取りあげる。

ヴェーバーは、商人の家からきわめて敬虔なキリスト教徒が生み出されるという事例を提示する。ヴェーバーによれば、特に敬虔派のもっとも真面目な信者たちが、非常に多くこの商人層から生まれ出ている [MWGI/18: 139=大塚訳: 30]。これは決して奇異な現象ではなく、一般的社会的に認められる事例であり、以下のように、「反動形成説」によってこの現象を説明することが可能であるかのように思われる。

この場合、内的な、商人に適しない気質〔を持つ人びと〕に、「拜金主義」に対するある種の反動 *Kontrastwirkung* が生まれた、と考えられるのかもしれない *könnte*。 [MWGI/18: 139=大塚訳: 30]

もうひとつヴェーバーは、これとは逆の反動形成のあり方を紹介している。

同じように、非常に頻繁に出くわす現象——セシル・ローズにいたるまで——である、牧師の家庭からきわめて強大な資本主義的企業家が生まれるという現象も、青年期の禁欲的教育に対する反動 *Reaktion* として説明しようとするかもしれない *könnte*。 [MWGI/18: 139=大塚訳: 30]

これが、あまりに敬虔なキリスト教徒の家庭で育ったがゆえに、反動として宗教とは対極にある営利活

動に向かったという現象であることは見やすいだろう。これまた、広く認められる一般的現象であるといえるものである。

なるほど、これらの事例には、禁欲的で敬虔な信仰のあり方と資本主義的営利活動との間に、内面的な「反動」から形成された「精神的特性」が認められ、それらの直接的関連が確認できそうではある。しかし、ヴェーバーが接続法Ⅱ式で表現しているところからも察知できるように、彼が問題とするのは、こうした現象ではないのである。

しかし、こうした方法では説明することのできない場合がある。それは、卓越した資本主義的職業感覚と、生活全体を支配し規定する信仰の最も強烈な形態とが、同一の個人ないし集団のうちに同時に存在する場合であり、そして、このような事実が決して散発的なものではなく、むしろ、歴史上重要なプロテスタントの教会やゼクテといった集団の全体にわたって、まさしく顕著な特徴となっているのである。
[MWGI/18: 139=大塚訳: 30]

先に紹介した二つの事例は、親と子といった別人格の間であれば「反動形成説」で説明が成り立つだろう。しかし、ヴェーバーが見ているのは、「反動形成説」では説明不可能な、信仰と資本主義的営利生活とがひとりの人物に同居している場合なのである。こうした現象がプロテスタントに広く認められるという事例を、ヴェーバーは次々に挙げていく
[MWGI/18: 139-46=大塚訳: 30-2]。

ヴェーバーは、(1) 信仰と社会層分化の直接的関係を(2) 信仰の「精神的特性」に見た。その「精神的特性」は、(3) 信仰の内在的特性によって生み出される。そうであれば、(4) 禁欲的な信仰と資本主義的営利活動には内面的な親和関係、それも(5) 世代間ではなくひとりの人格のなかに存在する直接的な内面的親和関係を認めねばならない。『倫理』冒頭から、ヴェーバーはここまで議論を重ねてきたわけである。

以上からヴェーバーは、次のように『倫理』において問題設定をすべき場所——問題設定ではない——を確定する。

……「労働の精神」, 「進歩の精神」あるいはその他の呼び方をされようと、そうしたものがプロテスタントイズムによって喚起されたと人は思いがちだが、それは今日そう思われるのが常であるような、「現世のたのしみ」としてや、そのほか何か「啓蒙主義的」な意味合いで理解されてはならないのである。ルター、カルヴァン、ノックス、フートらの古プロテスタントイズム der alte Protestantismus は、現在「進歩」と呼ばれるものとは心情的にはほとんど無関係だった。今日もっとも極端な信仰をもつ人々さえ、なして済ますわけにはいかない、近代生活のすべての側面について、古プロテスタントイズムはまっこうから敵対的だった。したがって、もしも、古プロテスタントイズムの精神における一定の特徴 Ausprägung と近代資本主義文化とに内面的親和関係を認めようとするなら、われわれは、いやおうなしに、(一見したところの) 多かれ少なかれ唯物論的なあるいは反禁欲的な「現世のたのしみ」にはなく、むしろ古プロテスタントイズムのもっていた純粋に宗教的な諸特徴のうちに〔それを〕求めなければならないのだ。[MWGI/18: 147=大塚訳: 32-3]

ヴェーバーは「信仰と社会層分化」という表題の下に、禁欲的信仰のあり方と資本主義的営利活動との内面的親和関係を探るという地点まで議論を進めてきた。それをここでは、さらに『倫理』全体の文脈へと引き上げている。問題のありかは、「古プロテスタントイズム²⁹⁾の精神における一定の特徴と近代資本主義文化との間の内面的な親和関係」である。

この箇所は『倫理』第1章第1節を閉じるにあたり、きわめて重要なまとめがなされているところである。しかし、この箇所は読み飛ばされているのが実際のところだろう³⁰⁾。「近代資本主義文化」なる語は、『倫理』ではここが初出であり、仮に読者がそ

れに気づいて、ヴェーバーがこれまで資本主義的営利活動などと述べていたものが、「近代資本主義文化」へと表現が変わったのかもしれないなど思ったとしても、その意味は問われないのではないか。いや、この「近代資本主義文化」という語に注目したとしても、橋本などは、ヴェーバーが「問題関心をずらしている」[橋本 2019: 44] などととんでもない論難をしているように³¹⁾、この「近代資本主義文化」という語がここで登場することには、やはり唐突感、違和感どまりで、理解が進まないようだ。

ここを読み飛ばすということになるのであれば、すでに確認した『倫理』の結論も読み飛ばしてしまうことが十分に予想され、結局『倫理』で何が論じられているのかわからないということになるのではないだろうか。また、これが唐突であったり、橋本のようにヴェーバーが問題をずらしていると受け取ったりして理解できないとすれば、それは、『倫理』を読む以前に、そこでは資本主義の発展や経済発展が論じられるはずだという思い込みがあるからだろうし、ヴェーバーが「文化意義」という観点から一貫して『倫理』を執筆していることへの無理解があるからだろう。

ヴェーバーは資本主義的営利活動にたずさわる社会層にプロテスタントが多いという事実から出発していた。ヴェーバーが見ているのは、資本主義的営利活動にたずさわる社会層である。そこに注目して見えてくるのは、彼らのあり方であり、ひいては近代 Modern に生きるわれわれのあり方であり、「近代資本主義文化」と呼ぶべきものなのである³²⁾。

さて、ここに問題のありかはひとまず確定された。しかし、まだ明確に問題設定がなされたわけではなく、その前に、ヴェーバーは「資本主義の精神」と「ルターの職業概念」を論じる。章を変えて、これらについて検討を加えていこう。

(以下続く)

凡例

ヴェーバーからの引用は、『マックス・ヴェーバー全集』*Max Weber Gesamtausgabe*を底本とする。略号は『全集』とし、参照ページを記載する際の略号として MWG を使い、そのあとに Abteilung をローマ数字で、Band を算用数字で示す。

『マックス・ヴェーバー全集』*Max Weber Gesamtausgabe, Tübingen : J.C.B. Mohr (Paul Siebeck)*

MWGI/7: *Zur Logik und Methodik der Sozialwissenschaften : Schriften 1900-1907*, herausgegeben von Gerhard Wagner in Zusammenarbeit mit Claudius Härpfer, Tom Kaden, Kai Müller und Angelika Zahn, 2018 [— Die „Objektivität“ sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis = 1998 富永祐治・立野保男訳、折原浩補訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波書店、『客観性』と略記、また、訳本については折原補訳と表記、— Geleitwort = 1998 折原浩訳「緒言」、前掲折原補訳所収]。

MWGI/9: *Asketischer Protestantismus und Kapitalismus, Schriften und Reden 1904-1911*, herausgegeben von Wolfgang Schluchter in Zusammenarbeit mit Ursula Bube, 2014 [— Die protestantische Ethik und „Geist“ des Kapitalismus = 1994 梶山力訳・安藤英治編『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》』未来社、『倫理』初版と略記、また、訳本については梶山訳・安藤編と表記、— Kritische Bemerkungen zu den vorstehenden „Kritischen Beiträgen.“ — Antikritisches zum „Geist“ des Kapitalismus.]

MWGI/7: *Zur Psychophysik der industriellen Arbeit : Schriften und Reden 1908-1912*, herausgegeben von Wolfgang Schluchter in Zusammenarbeit mit Sabine Frommer, 1995 [— Erhebungen über Auslese und Anpassung (Berufswahl und Berufsschicksal) der Arbeiterschaft der geschlossenen Großindustrie = 1975 鼓肇雄訳「封鎖的大工業労働者の淘汰と適応(職業選択と職業運命)に関する社会政策学会調査のための方法的

序説(一九〇八年)』『工業労働調査論』日本労働協会, 訳については鼓詠と表記]

MWGI/18: Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, Die protestantischen Sekten und der Geist des Kapitalismus, Schriften 1904-1920, herausgegeben von Wolfgang Schluchter in Zusammenarbeit mit Ursula Bube, 2016 [—1989 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店, 『倫理』, 初版との差異を示す際には『倫理』改訂版と略記, また, 訳本については大塚詠と表記]

なお, この本稿2では, 『倫理』について, 以下の日本語訳, 英訳にも言及している。それぞれ, 中山訳, Parsons 2001, Kalberg 2002, と略記する。なお, パーソンの英訳はもともと1930年に出版されたものである。また, コールバーグ訳が新訳であるにもかかわらず3版となっているのは, Roxbury社がすでにパーソンズ訳で初版, 第2版を出版しており, 3版を出版するに際してコールバーグ訳に変更したという経緯があるからである。

中山元訳 2010 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』日経BP社
Parsons, Talcott, tr., 2001, *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*, London, Routledge.
Kalberg, Stephen, tr. 2002, *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*, Third Edition, Los Angeles, Roxbury Publishing Company, 2002.

注

- 14) ヴェーバーは『倫理』を改訂するにあたって, その章や節を大きく変更してはいないが, この表題のみ若干修正している。第2章の表題「禁欲的プロテスタンティズムの職業倫理 Berufsethik」は, 初版段階では「禁欲的プロテスタンティズムの職業理念 Berufsidee」であり, また, 第2章第2節「禁欲と資本主義精神 kapitalistischer Geist」は, 同じく初版段階では「禁欲と資本主義 Kapitalismus」であった [MWGI/9: 242 = MWGI/18: 257 = 梶山訳・安藤編: 169, 294]。
- 15) 『倫理』第1章第1節については, 折原による

詳細な分析がある [折原 1977: 80-123] [折原 2005: 18-20, 41-79]。また, 折原は『倫理』全体の論理構造にも言及している。本稿は折原の研究から大きな恩恵を受けているが, 折原とは見解を異にするところもあり, また, 折原自身が折原 1977と折原 2005とでは説明を若干変更しているところも見受けられる。さらに, 安藤編 1977にも, 蔭山弘による分析がある [安藤編 1977: 56-65]。新書でありながらも, 『倫理』第1章第1節を紹介していることは, 著者の見識の高さを示すものと評すべきだが, 残念なことに, 蔭山は『倫理』を「宗教と資本主義の発展」が描かれたものだと考えてしまっている [安藤編 1977: 64]。

- 16) 実は, 『倫理』冒頭にその問題設定を読み取る誤解は, またしても K. フィッシャーにすでに現れていた。

フィッシャーは, 『倫理』を以下のように捉えていた。

本質的に次のような事実が, 問題設定のきっかけを与えている。(1) 近代企業における資本家, 企業家, 上層の熟練労働者層, および上級の技術的, 実務的な訓練を受けた従業者たちは, 概ねプロテスタントである。(2) バーデン, バイエレン, ハンガリーでは, 人文的素養を修めたカトリックの大学入学資格保有者の割合は, 実科ギムナジウムや実科学校などで近代的, 特に技術的, 商工業的な職業のための準備教育を受けた人の割合よりも極めて高いことが, 統計的に確認できる。プロテスタントのアビトゥーア合格者の場合には, その反対の比率が現れる。(3) 手工業職人では手工業にとどまる傾向がより強く示される。すなわち, カトリックはプロテスタントの同業者と比較して, 相対的に多くの場合, 親方 *Handwerksmeister* に止まろうとする。プロテスタントは, より大きな割合で, ここからより上層の熟練労働者や工業経営の幹部 *gewerblich Beamtetum* になるために, 比較的多くが工場へ流入する。ヴェーバー教授は, こうした現象の解明のために *zur Erklärung dieser Erscheinungen*, キリスト教的禁欲の精神が不可欠の構成要件として資本主義の精神に受け継が

れたという命題 These を打ち立てたのである。

[Fischer 1907: 232-3] (傍点は引用者)

『倫理』冒頭の職業統計に見られる「現象」を「解明 Erklärung」することこそが、『倫理』の課題だとフィッシャーは考えている。だからこそ、彼は「信仰と資本主義的發展との間に緊密な関係があることは明白である。ヴェーバー教授の賞賛すべき論文は、その並行現象を新たにかつ精力的に指摘している。」[Fischer 1907: 242] と述べ、ヴェーバーから強い反批判を受けることになるのである。

本文ですぐあとで触れるように、こうした誤解は、日本における研究でもいまだによく見かけるものである。その原因は、日本語訳にもあるようだ。すなわち、『倫理』第1章第3節につけられた題名の訳が、『倫理』の問題設定がまさにここにあることを分からなくさせているのではないかと思われるのである。

この第3節は、梶山訳では「ルッターの職業思想——研究の目的」という具合に、「ルッターの職業思想」と「研究の目的」とがダッシュで結ばれて訳されてしまった。大塚訳になってもそれは踏襲され、「ルッターの天職観念——研究の課題」となっている。中山訳では「ルッターの天職の観念——研究の課題」とほぼ大塚訳を踏襲した上で、「研究の課題」の部分のポイントをかなり落として小さく表記し、第3節がルッターの Beruf にかんする議論であることが強調されるいっぽう、『倫理』の「研究の課題」が論じられることは視覚的に、何か付け足しのようなものになっている。ヴェーバーは「第3節 ルッターの職業概念。研究の課題 Luthers Berufskonzeption. Aufgabe der Untersuchung」と表記しているのだが、「ルッターの職業概念」と「研究の課題」をダッシュで結んでしまうと、ヴェーバーは「ルッターの職業概念」にこそ『倫理』の「研究の課題」があると主張しているように思われかねない。よしんば、そうだととして読んでみたところで、今度は第3節の大半でルッターの職業概念が論じられるものの、それ自体が『倫理』全体の研究課題とはなっておらず、結果として、表題にある「研究の課題」の意味が

よく分からず、それを深く考えることがないままになってしまうのだろう。もとより、ヴェーバーがつけた表題自体、ほめられたものではない。第3節に、「ルッターの職業概念」も『倫理』の「研究の課題」もいっしょに配置するのはやめて、むしろ第3節は二つに分離し、前者を「第3節 ルッターの職業概念」、後者を「第4節 研究の課題」とすれば、よりはっきりと『倫理』の論理構成がわかったはずである。

ちなみに、タルコット・パーソンズの英訳では、目次 Contents には Luther's Conception of the Calling : Task of Investigation と書かれ、また、本文では Luthers Conception of the Calling が主題となり、Task of Investigation はポイントを落とし、かつ、副題の扱いとなっている [Parsons 2001: 39]。これには日本語訳と同様の問題が認められる。

それに対して、『倫理』を新たに英訳したステファン・コールバーグは、この表題の意味をきちんと理解している。その上で、訳者コールバーグの責任で、目次の段階から Luther's Conception of the Calling と The Task of Investigation を分け [Kalberg 2002: iii]、また、本文でも「ルッターの職業概念」の議論が終わり、「研究の課題」が始まるとコールバーグが判断した箇所 [Kalberg 2002: 47] に、表題として The Task of Investigation を挿入して、その理由を以下のように注記している。

この小見出しは、原著の目次にはあるが、本文には現れない。私がこの箇所にそれを挿入しておいた。ここでヴェーバーはルッター主義から、この研究の全般的な「課題」にかかわるもっと一般的な問いへと転換しているのである。 [Kalberg 2002: 188] (傍点は引用者)

ただし、コールバーグが『倫理』全体の「研究の課題」にかんする議論が開始すると判断した箇所 [Kalberg 2002: 47] は、実は原著では一つの段落のなかの途中 [MWGI/18: 251.Z.16.] であり、その段落を分断し、新たな段落を作った上でこの表題を入れ込んでいる。コールバーグが第3節の表題の意味をきちんと捉えたことは評価すべきだが、

原著者ヴェーバーの段落構成に込めた意図を無視しているところは残念である。

- 17) 折原はこれを「経験的一般化命題」[折原 1977: 82]と呼ぶ。折原の「命題」という言葉は、ここに示されたことは仮説でもなければ問題設定でもなく、実際に観察される現象を記述している、ということの意味している。
- 18) この部分の橋本「私訳」には訳語の脱落がいくつかあり、大塚訳より後退した訳文となっている[橋本 2019: 26]。なお、橋本 2019では、地の文ではなく行を改めて引用をする場合は必ずそれを「私訳」だと記しているが、その意図は不明である。この箇所もそうだが、他にも、勝手に原語とは違うルビを振っていたり[橋本 2019: 264など]、「職業義務 Berufspflicht」[MWGI/18: 487]に「天職を探してそれを受け入れるべきである」[橋本 2019: 263]という具合におよそ意味の違う訳が当てられていることなどを見ると、「私訳」とは原文に忠実な訳ではないということなのかもしれない。
- 19) 注8ですでに指摘したとおり、仲正はカトリックよりもプロテスタンティズムのほうが日常生活を縛る規則が少なく、自由な経済活動を許すものであり、彼らが資本主義をリードするのだという仲正オリジナルの前提(=思い込み)から『倫理』を読んでいる。この第1節冒頭をそうした前提から読んで仲正の思い込みが確信に変わってしまったため、このあとヴェーバーが第1節で展開する議論を仲正は一顧だにしない。

また、橋本 2019は、全篇にわたってプロテスタントが「経済的に成功する」ことを疑いようのない事実であるかのように論じている。これはヴェーバーのいう「信仰への帰依という単なる事実が一定の経済的發展をまったくもって魔法のように生み出すことができるかのような〔あり得ない〕見解」[Weber 1907: 24=MWGI/9: 483-4]である。わざわざ指摘するのも「バカげている töricht」が、プロテスタントには富裕な人もいれば貧困にあえぐ人もいる。何より、カルヴィニズムの「非人間的な教説」が貧者、弱者を敵視し、排除しつつも強制的に包摂し、たとえ滅びの刻印を押された者でも神の栄光のために労働を強制され

ていくことが、『倫理』でしっかり指摘されている[MWGI/18: 278-88, 436-7=大塚訳: 156-68, 311, 316-7など]。こうした点については、橋本はまったく触れることもなく、プロテスタントは「経済的に成功する」ことになっている。後出注27も参照。

- 20) ヴェーバーはこの第1章第1節では、参照すべき文献や事実についての指摘はするものの、はっきりと誰かを論敵とし、その学術的な議論を取り上げるという仕方では議論をしてはいない。本文でこのあとすぐに検討する、経済原因論である「一般解放説」という仮説は、マルクス主義への批判を意図したものだと思えばもちろんそう考えられないわけではない。しかし、この「一般解放説」は、仮にマルクス主義が想起されたとしても「漠然とした一般的な表象の範囲」[MWGI/18: 148=大塚訳: 37]でその妥当性が検討されるもので、ヴェーバーはマルクス主義にまで踏み込むことなく「一般開放説」を吟味している。
- 21) この呼称は、折原による[折原 1977: 84]。ヴェーバー自身が使用しているものではない。
- 22) プロテスタントとカトリックの違いを述べる際に、ヴェーバーはオフエンバッハの論考[Offenbach 1900]を参照している。やや細かいことになるが、ヴェーバーはオフエンバッハの論考の出版年を1901年としている[MWGI/18: 126-7=大塚訳: 19-20]が、これは誤記であり正確には1900年である。なお、オフエンバッハの論考は1901年版も存在している[Offenbach 1901]。しかし、その現物を確認したが、これは本文については1900年版をそのまま転載したものであり、他方で、図版や表の多くを削除したものである。

ヴェーバーはこの「例証」について、Offenbach 1900の54ページを参照指示している[MWGI/18: 132=大塚訳: 23]。なるほど、54ページにその記述は見つかるが、55ページまで連続して論じられる内容であり、本来54ページ以下、あるいは54-5ページを参照とすべきところだろう。

ところで、『倫理』冒頭はOffenbach 1900を参照する箇所がいくつかあるが、『全集』編者が指摘するとおり[MWGI/18: 127]、オフエンバッ

ハは、人口にかんする数字の典拠に不統一があるにもかかわらず、信仰ごとの割合を算出するにあたってそれを無視し同列に並べていたり（不正確、不統一の数値が並ぶことになる）、実科ギムナジウムに通う生徒の割合について誤記をしていたりする [Offenbach 1900: 16]。そして、ヴェーバーは、こうした「不備」があるオフエンバッハの統計をそのまま『倫理』に引いてしまっている。

オフエンバッハは実科ギムナジウムに通う生徒の割合について、プロテスタントが69%、カトリックが31%、ユダヤ人が9%だとし [Offenbach 1900: 16]、ヴェーバーもそれをそのまま『倫理』に引用している [MWGI/18: 131=大塚訳: 22]。もちろん、これでは合計すると100%を超えてしまうので、不正確な数字であることは間違いない。『全集』編者は、おそらく vermutlich, 実科ギムナジウムに通う生徒の割合の69%は誤記で、正しくは59%だろうと推測している [MWGI/18: 131]。もちろん、そうすればつじつまが合うが、ヴェーバーは『倫理』改訂版でもこの69%という数字を変更、訂正することはなく、なおかつ、初版以来ずっとイタリックで強調し続けている。ヴェーバーはむしろ69%という数字は誤記ではなく、正しい数字であると思っていた（つまり、数値のおかしさに気づいていたとすれば、他の数字が間違っていると考えていた）のかもしれない。もちろん、『全集』編者同様、私も推測の域を出るものではないが。

ところで、このオフエンバッハの統計の間違いについては、ジョージ・ベッカーの研究 [Becker 1997] があり、それについて橋本 2019 で触れられている。橋本は各種学校へ通うプロテスタントとカトリックの比率についてオフエンバッハの出した数字とベッカーが計算しなおしたという数字が併記された表を引用している [Becker 1997: 487] [橋本 2019: 293] (なお橋本は引用に際して数値を間違えた箇所があり、また、Realgymnasium を「自然科学系高等学校」としている)。

詳論はしないが、なるほど、実科ギムナジウムに通うプロテスタントをオフエンバッハが69%としたところがベッカーの再計算では52%となっ

ており、また、カトリックについてはオフエンバッハが36%に対してベッカーは31%としていて、プロテスタントとカトリックとの比率の差が小さくなってはいる [Becker 1997: 487]。その他の数字については、オフエンバッハとベッカーそれぞれの出した数値について、大きな違いは認められない。

ベッカーは、オフエンバッハの研究にあるデータをヴェーバーが「プロテスタントのエートスの実在を示すための明示的な統計的証拠」としているが、そのデータはヴェーバーという「学校の役割に関するデータの観念論者の解釈」を支持するには「間違いなく不十分」であり、「おそらく [支持できるところが] 存在しない」と述べている [Becker 1997: 491-3]。ベッカーは、オフエンバッハの統計の数値が、『倫理』の論証のための重要な証拠となっていると思込んでいるようだ。しかし、ベッカーはみごとに誤解しているが、オフエンバッハの論考は、『倫理』の論証のための根拠ではまったくないのである。ヴェーバーは『倫理』を書き始めるにあたり、「信仰と社会層分化」の様子を知る手がかりとして、それも現代の統計と分かった上で、オフエンバッハを引いただけである（ヴェーバーは『倫理』改訂にあたって、現代の統計からは過去の時代に信仰がもった力を十分知り得ないところがあるという趣旨の指摘を加筆してもいる [MWGI/18: 126=大塚訳: 19]）。それに、上に紹介したとおり、この統計の数値をベッカーのそれに置き換えたところで、『倫理』の議論に齟齬をきたすところはなく、プロテスタントとカトリックの教育に対する違いを見てとれる。もちろん、オフエンバッハの統計が間違っていれば正されるべきだし、それを間違ったまま引用したヴェーバーの記述も訂正すべきだろう。その限りで、ベッカーの再計算は意味があるのかもしれない。しかし、この間違いは、『倫理』の問題設定とも、そしてヴェーバーが到達する結論ともまったく別に取り扱われるべきものである。

橋本は、このベッカー論文を無批判に受け入れた上で、プロテスタントとカトリックの教育に見られる違いについて「ヴェーバーの理解は正しい

のか」と疑問を投げかけ、「結論を言えば、いずれも(ヴェーバーもオッフエンバッハも——引用者)あやしい。」と述べる[橋本 2019: 303]。さらに橋本は、ベッカーの論考が「プロテスタンティズムにおける勤労エートスが資本主義の発展を導いたという「プロ倫」テーゼの一般的解釈」[橋本 2019: 292]を「大きく修正する」[橋本 2019: 296]ものだともいう。しかし、すでにあきらかにしたように、「プロテスタンティズムにおける勤労エートスが資本主義の発展を導いた」ということは、『倫理』では「バカげた教条的テーゼ」と呼ばれている当のものであり、それを「大きく修正する」という意義をベッカーの議論に認めること自体、意味を持たない。

- 23) 「精神的特性」が教育によって獲得されるといふ考察は、『倫理』はもちろん、ヴェーバーの「文化科学」全体にかかわるものであり、また、当時の「自然科学」的知見とのせめぎ合いのなかにおかれて捉えられるべきもの[三笠 2000][三笠 2019]だが、ここでは、以下の点だけ指摘しておく。

ヴェーバーは、人間の労働に関する特性を、生得的なものや遺伝によって一元論的に説明する人種理論や優生学を強く警戒していた。たとえば、『倫理』の方法論が示されている『客観性』でヴェーバーは、「文化事象の原因をもっぱら「人種」に求める類いの因果的遡行」を行うような人種理論、優生思想は、「単にわれわれの無知をあかすだけのことでしかない」と述べていた[MWGI/7: 170=折原補訳: 67]。また、『倫理』でも、労働の適性について、それを人種的特性に還元して説明する学問的風潮に疑問を呈している[MWGI/18: 181=大塚訳: 70]。

なお、ヴェーバーが『倫理』初版を発表した後に行った工業労働調査も、こうした認識に支えられて実施されている。たとえば、1908年に行われた調査の「方法序説」のなかに、次のような一文がある。そこでは、労働適性を生得的なものとしてせず、教育などによって獲得されると考えていることが明瞭に示されている。

すでにこれまでの検討から、次のことが方法的

に賢明であると思われる。すなわち、労働適性の偏差の根拠を分析する場合、遺伝仮説から出発せずに、こうした相違には「遺伝形質」がいたるところで同時に働いている可能性があると、いうことを常に意識しながらも、しかし doch、ともかく可能なかぎり、社会的また文化的な要素 Provenienz や教育と伝統の影響の吟味を常にまず第一に試み、この説明原理を貫くということである。[MWGI/11: 116=鼓訳: 36]

また、あわせて次の注24も参照。

- 24) この「精神的特性」への注目という点は、『倫理』での議論を展開していく上で、大きなポイントになっていると思われる。折原は、この「精神的特性」という点には重きを置いていないようである[折原 1977: 84]。折原は、プロテスタントとカトリックの教育および職業のあり方についての「二種類の事実群」を、「経済→宗教」という因果を見る「唯物的」な「一般解放説」の妥当範囲を限定し、「宗教→経済の因果関係」への考察へ移るためのものとして位置づけてはいるが、この「精神的特性」にはほとんど注意を向けない[折原 2005: 59-60]。しかし、『倫理』は、まさしく「精神」に焦点が合わせられていることを思えば、ヴェーバーがここで「精神的特性」という議論の方向性をはっきり示したことは、しっかりふまえられるべきだろう。なお、蔭山はヴェーバーが「精神的特性」——蔭山は「精神的態度」と呼ぶ——を「重視していた」と明確に指摘している[安藤編 1977: 61]。しかし、すでに指摘したように、残念なのは、それが「資本主義発展」を促したととらえていることである。
- 25) この呼称も折原に準じているが、折原自身は「過補償動機仮説」[折原 1977: 86]などと記している。なお、ヴェーバー自身が使用している呼称ではない。
- 26) 大塚訳では「現在における」が脱落している。
- 27) ここでもまた、ヴェーバーはプロテスタンティズムという信仰を持つことが原因となって資本主義発展がもたらされたと述べているという誤解が立ち現れるようである。さらに、橋本 2019はこの点について誤解というレベルにとどまらない

「歴史」を示す。

ヴェーバーはここで、「経済発展」が原因となつて、その結果として「プロテスタンティズム」が受け入れられたと想定しているわけではない。経済的に発展した都市が、どうしてプロテスタンティズムの受容に適していたのかという、因果の「適合性」を問題にしている。経済発展とプロテスタンティズムの受容は、大まかに言えば、同時に進行していく。経済発展がプロテスタンティズムの受容をもたらし、プロテスタンティズムの受容が経済発展を導いていく。このように、「経済発展」と「プロテスタンティズム受容」のあいだには、いわば「相性のよさ」が生まれる。ヴェーバーはこの相性のよさ、あるいは因果の適合性に関心を寄せている。[橋本 2019: 29]

橋本は「因果」という関係と、「因果の「適合性」や「相性のよさ」という関係とは、意味するところが違うといたいらしいが、その違いはわからない。橋本は、ヴェーバーは「経済発展」と「プロテスタンティズム」との間に因果関係を想定しているわけではないと引用冒頭で述べているが、しかし、その直後に現れる「相性のよさ」についての説明は因果関係を示しているようである。

それはさておいても、経済発展とプロテスタンティズム受容が「同時に進行していく」などという「歴史」は『倫理』にはいっさい書かれていないし、繰り返し指摘したように、『倫理』は経済発展について書かれたものではない。仮にヴェーバーではなく橋本の責任で上記のようなことを主張しているのだとしても、そんな「歴史」が何に依拠すれば主張できるのか、まったく根拠も示されていない。

『倫理』に限らず、難解な著作にかんする新書や解説本では、概念定義をあえて簡素化したり、論理展開を換骨奪胎してわかりやすさを追求することがある。しかし、すでに注13で指摘したように、大澤 2019の牽強附会の説はそれとは別次元であり、橋本 2019にも、簡素化やわかりやすさの追求とはまったく別の、諸概念にかんする調査、

検討、使用がきわめて杜撰で恣意的だという問題がある。それは「歴史」についての叙述にも同様に見られることである。ついでに次も指摘しておこう。

橋本は、パニヤン『天路歷程』とデフォー『ロビンソン・クルーソー』という「この二冊の出版のあいだに、イギリスは最初の産業革命を経験した。」[橋本 2019: 256] (傍点は引用者)と述べる。パニヤンの『天路歷程』は第1部が1678年に、第2部が1684年に出版され、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』は1719年に出版されている。ということは、イギリスは1678年から1719年までに産業革命を経験したと橋本は考えていることになる。さらに、別の箇所では橋本は、「産業革命が起きた一八世紀」[橋本 2019: 47]とも述べているから、橋本は、イギリスは1701年以降1719年以前に産業革命を経験したという驚くべき「歴史」を主張していることになる。

28) この呼び方も折原に倣った [折原 1977: 88]。これまで同様、ヴェーバー自身がこの語を使っているわけではない。

29) 「古プロテスタンティズム Altprotestantismus」については、ヴェーバーの専門研究でもなかなか立ち入った議論はなされず、新書や解説本ではまず無視されているものである。『倫理』では Altprotestantismus という名詞は使われず、der alte Protestantismus という表記が3箇所 [MWGI/18: 147, 347, 394]、形容詞形が4箇所 [MWGI/18: 147, 253, 341, 408]、確認できるのみである (なお、E. ラッハフェールの『倫理』批判への反批判論文で、Altprotestantismus が2箇所 [MWGI/9: 581] 使用されている)。また、『倫理』以外を見渡しても、明確な定義はなされず、この「古プロテスタンティズム」という概念は、ヴェーバーと深い親交のあったエルンスト・トレルチが「新プロテスタンティズム Neuprotestantismus」とともに概念化したものであり、ヴェーバーもそれをひとまずは受け入れていると見なければならぬだろう (とりあえず、堀 1984やグラーフ 2001などを参照)。

トレルチは、1906年4月21日にシュツットガルトで開催された第9回ドイツ歴史家会議の講演

「近代世界の成立に対するプロテスタンティズムの意義」——本来、ヴェーバーが講演を行う予定だったが、トレルチが代行した——のなかで、これら両概念について論じている [Troeltsch 1906] [Troeltsch 1911]。トレルチによれば、「古プロテスタンティズム」と、「新プロテスタンティズム」とは、「十分に区別される」 [Troeltsch 1906: 15 = Troeltsch 1911: 26 = 堀訳: 41] ものである。なお、トレルチのこの論考の引用には、堀訳に倣って、初版である Troeltsch 1906 を底本として訳を示し、改訂版である Troeltsch 1911 で加筆された箇所は山括弧にくくり、削除された箇所は二重山括弧にくくって示す。

ルター派およびカルヴィニズムの生粋の古プロテスタンティズムは、反カトリック的な救済論にもかかわらず、全現象としては、徹して中世的意味における教会文化なのである。古プロテスタンティズムは国家と社会、教育と学問、経済と法を、啓示という超自然的な基準にしたがって秩序づけようとし、中世と同じくいたるところで自然法を、根源的には神の法と同一なものとして組みいれている。それに対して、17世紀末以来の近代プロテスタンティズムは、〔新旧〕宗教間の同権をみとめる国家、もしくは宗教にまったく無関心な国家の地盤に侵入し、さまざまな宗教的確信や宗教共同体が並存することおよび並存しうすることを原則としては承認した上で、宗教的組織や宗教的共同体の結成を、自由意志や個人的確信にまかせた。さらに、近代プロテスタンティズムは、自分のほかに完全に解放された世俗生活を原則的にみとめ、世俗生活を直接にも間接にも、もはや国家の力を介して支配しようとはしていない。(このことと関連して) 近代プロテスタンティズムは、このような〔世俗生活にたいする〕支配を可能にもし、また推進もした「神の律法」と「自然法」との同一化にかんする古い理論をきれいさっぱり忘れてしまったので、まったく理解できなくなってしまったほどである。 [Troeltsch 1906: 14-5 = Troeltsch 1911: 24-5 = 堀訳: 40-1]

上記の引用以外にも、トレルチの「古プロテスタンティズム」と「新プロテスタンティズム」との相違についての議論は多岐にわたって展開されているが、ここから少なくとも『倫理』で使われる「古プロテスタンティズム」——「新プロテスタンティズム」という概念をヴェーバーは使わない——は、ひとまずはルターやカルヴァンといった宗教改革者由来の正統信仰を指していると考えていだろう。

また、「洗礼主義 Täuferum」について、トレルチは「古プロテスタンティズム」とも「新プロテスタンティズム」とも区別されるものとして位置づけている。

……古プロテスタンティズムは、つぎのような歴史形象からもはっきり分離される。すなわち、その歴史形象は、古プロテスタンティズムと並行し、そしてはじめて新プロテスタンティズムがそれを多かれ少なかれ取り入れたが、《しばしば区別できないほど。》しかも新プロテスタンティズムから内面的に深く区別され、それ固有の歴史的影響をもっていた。すなわち、それは、〔1〕人文主義的な歴史的-文献学的-哲学的神学であり、〔2〕〈自由教会的でゼクテ的な〉洗礼主義、および〔3〕〈まったく個人主義的-主観主義的な〉スピリチュアリズムである。 [Troeltsch 1906: 15 = Troeltsch 1911: 26-7 = 堀訳: 42] (亀甲括弧にくくった1から3の数字は、堀訳に倣ってわかりやすくするための追記)

見られるように、トレルチは「洗礼主義」を「古プロテスタンティズム」とも「新プロテスタンティズム」ともはっきりと区別しているのに対して、ヴェーバーは最終的に「古プロテスタンティズム」とともに「禁欲的プロテスタンティズム」のなかにまとめてしまい、いっしょに扱う。

以上のように、とりあえずはトレルチの概念規定を参照すべきとはいえ、ヴェーバーのいう「古プロテスタンティズム」がトレルチのそれと完全に一致していると判断するわけにはいかない。たとえば、ルター派については、「古プロテスタン

ティズム」とは呼びながらも「非禁欲的」であるとして、ヴェーバーの考える「禁欲的プロテスタンティズム」から除外しているなど、短絡的な理解は避けなければならない。

なお、橋本 2019には「古プロテスタンティズム」および「新プロテスタンティズム」についての混乱に満ちた記述があるので、その点だけ手短かに指摘しておく。

まず、「古プロテスタンティズム」について、橋本は「私訳」で「初期のプロテスタンティズム」「初期のプロテスタント」などとわざわざ既存訳を変更して訳して、alt は時期、時代を指す——いつなのかは明示されない——ものとのみ考えているようである。他方、ヴェーバーは使わない「新プロテスタンティズム」について「初期のプロテスタンティズムを継承した新しいプロテスタントの人たち」[橋本 2019: 44]などと、何を継承するのか不明だがこれらの間の継承関係、連続性を認めている。また、橋本は「古プロテスタンティズム」とは異なり「新しいプロテスタンティズム」については、「ヴェーバーが生きた時代（一九世紀後半から二〇世紀前半）の新しいプロテスタンティズム」[橋本 2019: 44] とその登場する時期を示し、それに帰依した人びとは、「経済的にゆたかな生活を送っていた」だとか、「それほど禁欲的ではなかった」だとか、「しだいに現世の生活を肯定し、世俗的な喜びを享受するようになってい」く彼らは、「進歩主義者」であるだとかいった、根拠不明の断定を続ける [橋本 2019: 43-4]。また、深井智朗のトレルチへの誤解 [深井 2017: 106-24] に依拠したのだろうか、「洗礼主義」を解説する際、橋本はこれを「新しいプロテスタンティズム」とも呼ばれる」[橋本 2019: 136] (傍点は原文ではゴシック体) と述べている。新旧プロテスタンティズムについても、洗礼主義についても、ヴェーバーもトレルチもふまえず、誤解や混乱に満ちた記述であり、総じて意味不明となっている。

- 30) 多くの解説書などもそうだが、大澤 2019や仲正 2014には、ヴェーバーが「近代文化」「資本主義文化」への関心を持っていたことはまったく触れられない。大澤は、予定説についても大澤オリ

ジナルな説明を展開することで『倫理』の説明をほぼ終えてしまうし、仲正はヴェーバーが「神に対する強い信仰が、近代における資本主義発展の原動力になったとする、かなり逆説的な仮説」[仲正 2014: 29-30] を示したといたり、ヴェーバーが「『資本主義』の起源を探究した」[仲正 2014: 67] とまでいっていて、一貫してヴェーバーが資本主義という経済制度、経済発展を問題にしたと思っている。

- 31) 橋本は、「プロテスタンティズムの倫理は、資本主義の発展にとって、どこまで重要な原因だったのか」という問いは「ヴェーバーが『プロ倫』の最初のほうで立てた問題であった」といっていた [橋本 2019: 131] (傍点は引用者)。そう信じて疑わない橋本が、この「近代資本主義文化」という語に直面したとき、当惑したのだろう、次のように述べている。

では、初期のプロテスタンティズムと資本主義文化のあいだには、どんな親和関係があるのか。実はヴェーバーはここで、最初の問題を微妙にずらししている。資本主義の「経済発展」への関心から、資本主義の「文化」への関心へと、問題関心をずらししている。[橋本 2019: 44] (傍点は引用者)

ヴェーバーは問題をずらしなどしない。橋本のいう「最初の問題」など存在しないのだから、ずらしようもない。すでに確認した『倫理』の結論を見ても、ヴェーバーは一貫して「近代文化」「近代資本主義文化」を問うているのである。

- 32) このことについては、さらにヴェーバーの学問の根底には、近代の「文化意義」への問いがあったことを論じなければならないが、それは本稿の最後に行うとにして、ここでは『倫理』第1章の論理構造の解明を進めたい。とりあえず、「文化意義」という点については、三管 2014の「補論」を参照。

文献

安藤英治編 1977 『ヴェーバー プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 有斐閣

- 大澤真幸 2019 『社会学史』講談社
- 折原浩 1977 『デュルケームとウェーバー 上』三一書房
- 折原浩 2005 『ヴェーバー学の未来——「倫理」論文の読解から歴史・社会科学の方法会得へ』未来社
- グラーフ, フリードリッヒ 2001 『トレルチとドイツ文化プロテスタンティズム』深井智朗・安酸敏眞編訳, 聖学院大学出版会
- 仲正昌樹 2014 『マックス・ウェーバーを読む』講談社
- 橋本努 2019 『解説 ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』』講談社
- 深井智朗 2017 『プロテスタンティズム——宗教改革から現代政治まで』中央公論新社
- 堀孝彦 1984 「解説あとがき」トレルチ著・堀孝彦他訳『トレルチ著作集 8』ヨルダン社
- 三笥利幸 2000 「マックス・ヴェーバーにおける「人種」概念の再検討」『社会学史研究』第22号
- 三笥利幸 2014 『「価値自由」論の系譜——日本におけるマックス・ヴェーバー受容の一断面』中川書店
- 三笥利幸 2019 「マックス・ヴェーバーにおける「科学的問題」とは」『立命館産業社会論集』第55巻第1号
- Fischer, Karl, 1907, Kritische Beiträge zu Professor Max Webers Abhandlung: „Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus,“ in: *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd.25, Tübingen : J.C.B. Mohr.
- Offenbacher, Martin, 1900, *Konfession und soziale Schichtung : eine Studie über wirtschaftliche Lage der Katholiken und Protestanten in Baden*, in herausgegeben von Carl Johannes Fuchs, Gerhard von Schulze-Gavernitz, und Max Weber, *Volkswirtschaftliche Abhandlungen der Badischen Hochschulen, Bd.4, Heft.5.*, Tübingen und Leipzig, J.C.B.Mohr.
- Offenbacher, Martin, 1901, *Konfession und soziale Schichtung : eine Studie über wirtschaftliche Lage der Katholiken und Protestanten in Baden*, Tübingen, H. Laupp.
- Troeltsch, Ernst 1906, Die Bedeutung des Protestantismus für die Entstehung der modernen Welt: Vortrag, gehalten auf der IX. Versammlung deutscher Historiker zu Stuttgart am 21. April 1906, in: *Historische Zeitschrift*, Der ganzen Reihe 97. Band, Dritte Folge 1.Band. (=1984 堀孝彦訳「近代世界の成立にたいするプロテスタンティズムの意義」堀孝彦他訳『トレルチ著作集 8』ヨルダン社, 訳については堀訳と略記)
- Troeltsch, Ernst 1911. Die Bedeutung des Protestantismus für die Entstehung der modernen Welt, *Historische Bibliothek*, herausgegeben von der Redaktion der Historischen Zeitschrift 24.Band, München und Berlin, Druck und Verlag von R.Oldenburg.

Max Weber and “Modern Culture” : The Research Question of His Protestant Ethic Article (2)

MITOMA Toshiyukiⁱ

Abstract : In chapter 1 of this article, I argue concerning some misunderstanding about Max Weber’s Protestant Ethic article, that assumes that ascetic Protestantism would promote economic development. In chapter 2, I investigate the logical structure of Weber’s article’s section 1, chapter 1 because this misunderstanding occurs frequently at the beginning of his article. Weber shows in section 1 of his chapter 1, ‘Religious Affiliation and Social Stratification,’ the phenomenon that people who own capital, employees, more highly educated skilled workers, and more highly trained technical or business personnel in modern companies tend to be overwhelmingly Protestant. He examines some hypotheses to explain this, and dismisses them for their defects. Finally, he shows the point of his article’s problem, which is not the problem itself. That is below: his investigation should focus on Protestantism’s purely religious features if an inner affinity is to be discovered at all between certain streams of the old Protestant spirit and the modern culture of capitalism. Weber should argue ‘the Spirit of Capitalism’ and ‘Luther’s Conception of the Calling’ before he fully reveals the question of his article.

Keywords : Weber, Protestant Ethic article, Protestantism, spirit, the culture of capitalism, modern culture, Social Stratification, inner affinity

i Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University